

「初等教育との接続」にかかわって

——「就学準備」／「就学準備不足の防止」を手がかりに——

石黒 万里子

(東京成徳大学)

1. 課題設定——「就学準備」と「就学準備不足の防止」

イギリスの就学前教育は、OECD（2006=2011）による報告書において、「就学準備型」に分類されている。たしかにイギリスの就学前教育段階のナショナルカリキュラムである「乳幼児期基礎段階」(Early Years Foundations Stage, 以下 EYFS) では、「就学準備」(school readiness) がそのねらいとして明示されている。しかしこうしたねらいに対して、イギリス国内で合意が形成されているとは言い難い。そのことが如実に示されているのが、2012年の EYFS 改訂を方向づけた報告書で用いられた、「就学準備不足」(school unreadiness) という表現である。本報告では、OECD が示した就学準備型の特徴に沿ってイギリスの就学前教育を確認しながら、イギリスで「就学準備不足」という表現が用いられることの背景について考えてみたい。

イギリス最大の子ども支援団体のひとつ、Action for Children の代表であるティッケル女史を責任者として作成された EYFS 改訂のための報告書には、次のように記されている。「就学準備ということばは、子どもたちが不適切な低年齢で読み書きを覚えなければならないというプレッシャーにさらされてしまうことを暗に示すものとして解釈する人がいる。そこで、『就学準備』という表現が持つこのような曖昧で感情的な意味合いを避けるため、逆の視点、すなわち『就学準備不足』(school unreadiness) という面から考えている」(Tickell, 2011, 3.3)、という。就学準備ということばは不必要なプレッシャーに子どもをさらすという意味で、時に避けられがちであるけれども、実際に子どもが就学に対して準備ができていないというのは、その子にとっても周囲の子どもたちに対しても、初等学校進学時だけでなく、その後の人生においてネガティブな影響をもってしまふことが実証されている。そこで、あえて「就学準備不足」という語を用いて、その防止をねらいとしているというのである。

2. 「就学準備型」の就学前教育の特徴

OECD の報告書（2006=2011）では、世界の就学前カリキュラムの二つの伝統として、「就学準備型」と「ホリスティック型（ソーシャルベダゴジー）」が示されている。後者と比較したときの就学準備型の特徴として、以下の3点がある。第一にそのカリキュラムは、詳細な目標の提示、

表1 EYFSにおける領域とELGの数

2008.9～(ELG:69)	2012.9～(ELG:17)	
1. 人格・社会性・情緒の発達(14)	主要3領域	1. コミュニケーション・言語(3)
2. コミュニケーション・言語・読み書き(19)		2. 身体の発達(2)
3. 問題解決・推論・数的処理(12)		3. 人格・社会性・情緒の発達(3)
4. 周りの世界の知識と理解(11)	特有の4領域	4. 読み書き(2)
5. 身体の発達(8)		5. 数学(2)
6. 創造力の発達(5)		6. 周りの世界の理解(3)
		7. 表現芸術とデザイン(2)

注・()内はELGの数。

で詳細であり、規範的であると指摘している(OECD 訳書2011:82)。

そこで次の部分では、(1)カリキュラムについてEYFSを、(2)目標について「乳幼児期学習目標」(Early Learning Goals, 以下ELG)を、(3)評価については主に「乳幼児期基礎段階プロファイル」(Early Years Foundations Stage Profile, 以下EYFSP)を手がかりに、国際的にみて「就学準備型」とされるイギリスの就学前教育の特徴について確認してみたい。

3. イギリスの就学前教育におけるカリキュラム、目標、評価

1 2012EYFSの特徴

2008年、イギリスで0歳から5歳児を対象として初めて導入されたEYFSは、2012年にその第一次改訂(以下、2012EYFS)が行われ、実施されている。2012EYFSは、「人生への備え、就学準備」(Tickell, 2011)をねらいとし、主に以下の5点を特徴としている。すなわち、①書類作成や手続きの煩雑さの軽減、②保護者と専門家との連携の強化、③学習領域における最も本質的な3領域の焦点化、④5歳児における評価(EYFSP)の簡素化、⑤2歳児での成長チェックの導入、である。2008EYFSと2012EYFSの違いは表1の通りである。

2012年の改訂に伴い、コミュニケーションに関する領域が「コミュニケーション・言語」と「読み書き」の二つに分かれたために、6領域から7領域へと増えているが、ELGの数は69から17へと大幅に削減されている。なおコミュニケーションに関するELGについては後に詳述したい。

2 乳幼児期学習目標(ELG)について

乳幼児期学習目標(ELG)は、「様々な能力や成長の度合いの子どもが、5歳に達する日の後にくる9月1日までに身に付けていることが期待される、知識・スキル・理解」(2006チャイルドケア法)、「すべての子どもがレセプション学年の終わりまでに獲得しているべき知識・スキル・理解の要約」(2012EYFS)と定義されており、きわめて明確な到達目標として掲げられている。

学習と技能・就学準備の重視を特徴とする。第二に、目標については、到達目標(⇔努力目標、方向目標)が示され、国家が定めた基準があり、すべての就学前教育の提供主体に対して適用される。第三に評価については、明確な目標に基づいた評価が実施され、対象となる能力については事前に予測されている。つまり、普遍的で明確な目標に基づいた評価がなされるのであり、子ども個人に合わせた、状況依存的なものではない。こうした観点からOECDの報告書は、イギリスのEYFSが、EYFS以前のカリキュラムの指針であった『0歳から3歳まで』と比べ、はるかに教師主導

この目標のあり方は、日本の就学前教育が、「心情・意欲・態度」という方向目標の立場をとることと大きく異なる点である。

ここで、ELGの具体的な内容について、コミュニケーションに関する領域の「書くこと」に焦点を当てて確認してみたい。2008EYFSにおける「書くこと」に関するELGは、以下のことであった。

- リストや物語、教訓など様々な様式で、いろいろな目的のために書こうとする。
- 自分の名前やラベル、キャプションなどを書き、時に句読点を使って単純な文章を作成する。
- 鉛筆を効果的に握り、判読可能な文字を書き、書かれた文字のほとんどが正しく形成されている。

一方、2012EYFSにおける「書くこと」に関するELGは以下の通りである。

- 発せられた音声に合う形で単語を書こうとして、音声上の知識を用いる。いくつもの一般的な不規則単語も書く。自分と他の人が読める単純な文章を書く。正確に綴ることのできる単語がいくつもあり、そうでない単語については音声上もっともらしく書く。

これらを日本の幼稚園教育要領と比較した場合、子どもにとって極めて高い到達水準が求められ続けていることが明らかである。

3 EYFSに基づいた評価について

評価について、EYFSPによる総括的評価と、日常的観察による形成的評価の二つの側面から確認したい。第一に、乳幼児期の終わり、すなわち5歳の進学時に作成されるEYFSPがある。

表2 2012乳幼児期基礎段階プロファイル（様式例）

名前	月齢
効果的学習の特徴	どのように（子どもの名前）は学ぶのか
遊びと探求 ● 発見と探求 ● 遊びを通して得た知識を用いる ● 喜んでやってみる	
活動的学習を通して ● 関わったり集中したりする ● 挑戦し続ける ● やり始めたことを達成することを楽しむ	
創造的になり批判的に考えること によって ● 自分自身の考えをもつ ● 新しいことを学ぶために、すでに知っていることを用いる ● 物事を行う方法を選び、また新しい方法を見つける	

学習の領域		側面	現れつつある	期待通り	超えている
コミュニケーション・言語	ELG01	聴く・注意を向ける			
	ELG02	理解する			
	ELG03	話す			
身体の発達	ELG04	動く・扱う			
	ELG05	健康と自己ケア			
人格・社会性・情緒の発達	ELG06	自信と自己認識			
	ELG07	感情と態度の管理			
	ELG08	人間関係づくり			
読み書き	ELG09	読む			
	ELG10	書く			
数学	ELG11	数			
	ELG12	形、空間、量			
周りの世界の理解	ELG13	人々とコミュニティ			
	ELG14	世界			
	ELG15	技術			
表現芸術とデザイン	ELG16	メディアと素材を探して使う			
	ELG17	想像的である			

2008EYFSP は13領域 (area) それぞれ9段階 (point) による評価であったが、2012EYFSP では、ELG の17側面 (aspect) について3段階 (期待通り、超えている、現れつつある) の評価がある。表2は、教育省による『2013年乳幼児期基礎段階プロフィールの手引き』(2013 *Early Years Foundation Stage Profile Handbook*) に示された、EYFSP の見本である。

第二に、日常的観察による評価は、2012EYFS が導入されたばかりであるため、ここでは2008EYFS に基づいて確認したい。2008EYFS の解説 (DCSF 2008) は、「誕生から11か月」、「8か月から20か月」に始まり、60か月程度までの子どもの成長を6段階に分け、前述の各6領域について、「発達に関すること」「注目すべき点」「効果的実践」「計画と環境構成」の4項目で、子どもの具体的な活動や経験について示している。またこれについては、チェックリストとして用いられるべきではないという (DCSF 2008 :5)。しかし、報告者が調査したナーサリーでは、解説における「発達に関すること」の項目をそのまま個人の観察記録の観点とし、達成された項目にはカラーペンで線が引かれ、隣の欄に日付が記入されるというように、チェックリスト的に用いられていたことも付け加えておきたい。こうした日常的な記録の積み重ねが、最終的に5歳児の進学時における EYFSP へとまとめられる。

なお EYFSP は、保護者と進学先の初等学校に送付されることになっており、「EYFS と KS1 それぞれの教員間の専門的な情報交換によって、KS1 への円滑な移行を支援」し、「1年生の教員が、すべての子どものニーズを満たすための効果的で応答的で適切なカリキュラムを立てられるよう援助する」ものであるという (2013 *Early Years Foundation Stage Profile Handbook*)。

4. 初等学校への接続を志向した就学前教育改革の背景

1 初等学校への接続に関する調査研究

こうした就学前教育改革の背景には、イギリス国内外における、就学前教育が就学後の達成に及ぼす効果についての実証研究の蓄積がある。例えば国内では、1997～2004年「効果的な就学前教育の実施プロジェクト」(The Effective Provision of Pre-school Education (EPPE) project) が、就学前教育が、初等学校での読みと数学のテストにおける子どもの得点と関係することを示している。しかし2005年「基礎段階から KS1 への移行に関する調査研究」(A Study of the Transition from the Foundation Stage to Key Stage1) では、就学前の「遊び基盤型のアプローチ (play-based approach)」から、KS1 におけるより「構造化されたカリキュラム」への移行が、困難を抱えていることが指摘されている。そこで、2009年「初等教育課程検討報告書」(Independent Review of the Primary Curriculum : Final Report) では、「就学前段階から14歳までの学習の継続性の改善」(勧告5) が勧告されている。

2 初等学校への接続と「就学準備型」との関係

世界的には OECD が、質の高い就学前教育を実現するための8つの政策原理を示しており、その中のひとつに「教育制度との強力で対等な連携」が位置づけられている (OECD 2001, 2006)。ただし OECD の報告書が、「就学準備型」の就学前施設だけが初等学校との連携を重視している

わけではないと指摘していることには注意が必要である。ホリスティック型においても、多様なメカニズムを通して初等学校とのつながりは維持されているという（OECD 訳書2011：67）。

イギリス国内においても、就学前教育と初等学校との連携は強調されつつも、「就学準備型」的特徴のみが重視されているわけではない。例えば2012EYFSでは、「遊びは子どもの発達において本質的に重要であり、探求し、問題について考え、他者と関係することを学ぶことによって、子どもは自信を形成する。～（中略）～子どもが成長するにつれて、そして子どもの発達が許す範囲において、子どもがよりフォーマルな学習に向けて用意し、1年生に向けて準備するのを支援するために、大人によって導かれる活動へと少しずつバランスを転換していくことが期待される」と、「遊び」の意義や子どもの自発的な活動の重要性が強調されている。

イギリスの教育関係者への、「就学準備」の意味合いに関する報告者による聞き取り（2012年11月実施、石黒2013）では、「『就学準備』に反対する人もいる。最終的には小学校への準備ができてるように、ということ在意図している。もっと広い意味でとらえてほしい。就学準備は人生への準備である」（教育省就学前教育担当者）、「イングランドは就学準備に力を入れていると言われているが、遊びを中心としている。2012EYFSではそれがより明確になっており、外遊びの重要性も強調している」（Foundations for the Future スタッフ）、「『就学準備』というねらいについて、子どもたちの自由や時間を奪うことがあってはいけないと思った。決してネガティブなものではないと説明されているが、まだあまり納得していない部分もある。EYとKS1の棲み分けについては常に議論されている」（公立プライマリースクール校長）という声が聞かれた。冒頭で示したティックル女史は、「『就学準備』は、単にカリキュラムに対して準備するのではなく、生活面も重視し子どもらしさも大切に。子どもが学校的環境に慣れ、初等学校にリンクできるような環境を構成していくことが大切である。『就学準備』というと、子どもらしい時期を奪うと感じる人もいる。そうした場合は就学準備と言わずに就学準備不足という表現を使うなど工夫している」（Tickell）と話してくれた。国際的には就学準備型に分類されるイギリスの就学前教育であるが、その含意や是非をめぐる議論があり、積極的に「就学準備」を掲げているというよりは、「就学準備不足の防止」という消極的な表現を用いざるを得ない状況のようである。

5. 結語

以上のようなイギリスの就学前教育をめぐる状況を踏まえ、イギリス以外の国にも共通と思われる論点を二つ指摘したい。第一に、「就学準備」を人生への準備と捉えその含意を整理し、より公正で効果的な制度の構築へと向かっていくことが重要であるが、その際、「準備」あるいは就学「前」という表現に対しては、乳幼児期それ自体を目的的に捉える立場からの反論が予想される。求められるのは、慣習的あるいは感情的ではない、実証的な議論であろう。

第二に、必要な教育制度改革もあるが、それが、各提供主体がもたらす望ましい多様性や柔軟性を損ねることにならないか注意したい。就学前教育については、そもそも多様な提供主体がそれぞれの理念とニーズに基づいて提供してきた歴史がある。それらに対し強制的に画一的な共通基準を押し付け、就学前教育を不要に硬直化させることなく、しかし、提供主体の種類によ

てその後の教育達成が異なるという格差問題の是正に向け、水準を確保していくことが課題である。

【参考文献】

Dame Clare Tickell (2011) *The Early Years : Foundations for life, health and learning : An Independent Report on the Early Years Foundation Stage to Her Majesty's Government.*

Department for Education (2012) *Statutory Framework for the Early Years Foundation Stage : Setting the standards for learning, development and care for children from birth to five.*

石黒万里子 (2013) 「イギリス」『諸外国の幼児教育施設の教育内容・評価の現状や動向に関する調査および幼児教育の質保証に関する国際比較研究』(平成24年度文部科学省委託「幼児教育の改善・充実調査研究」) pp.91-103.

OECD (2006) *Starting Strong II, Early Childhood Education and Care.* OECD Publishing. (星三和子ほか訳『OECD 保育白書——人生の始まりこそ力強く：乳幼児期の教育とケア (ECEC) の国際比較』明石書店、二〇一一年。)